

新 知 故 温

2021年2月25日に84歳で亡くなられた八幡泰彦氏を送る会が、10月27日に東京都内で行われました。

その八幡氏をはじめ、音響界の四大巨頭による座談会の後半です。日本の音響界が元気な時代の空気を味わうことができます。(編集部)

昭和55年に発足した日本PA技術者協議会の初代理事長である岡本廣基氏、3代目理事長の八幡泰彦氏、一足早く設立された日本演劇音響効果家協会の理事長を経験された田村恵氏、会の重鎮として活躍された辻亨二氏の4名の方にお集まりいただきました。

業界の草分け的な方々で旧知の間柄でもあります。しばらくぶりでの会合の方もおられ、話は弾みに弾みました。座談は3時間以上にわたりましたが、残念ながら誌面の都合上大半を割愛せざるを得ませんでした。この業界の草創期を生き抜いて来られた方々ならではの話をいろいろと聞くことができました。事務局の近くの料理屋で行い、並べられた酒と料理をつまみながら、古い話から最近の話と次から次と話題が移り、時間のたつのも忘れての座談会でした。音響に対する考え方や取組み方はそれぞれで異なっていますが、その熱意や思い入れは同じように熱く深いものが感じられました。

日 時：平成17年4月28日(木)

場 所：東京・高田馬場「磯浜」

出席者：岡本廣基氏(1927年生まれ/ (株)東京音響通信研究所)

田村 恵氏(1931年生まれ/ (株)音映)

辻 亨二氏(1927年生まれ/ (株)ショウビズスタジオ)

八幡泰彦氏(1936年生まれ/ (株)エス・シー・アライアンス)

座談会 『舞台音響家の歴史 いま伝えておきたいこと』 編集部

日本舞台音響家協会
「ステージサウンドジャーナル」
平成17年(2005年)5月発行号No.26より

◎海外公演の思い出

田村：辻さんの代理でソビエトに行っているあつたけど、面白かったね。ロシア語はオレ全くやったことないから、苦労したよ。「^{どもまた}吃又」で石に書いた絵が抜けたっていう、あれのタイミングのね、パッと出したらね、客席が「ワアッ」ってくるのが嬉しくてね。あれだけだね。

辻：だから頼んだんだよ。

田村：そこでカレー作ったよ。そしたらロシアでこんなカレー食べられるとは思ってなかったって、松竹の永山会長と奥さん二人で喜んでくれた。寸胴鍋2



田村 恵氏

つにカレー仕込んだよ。羽左衛門さんが「あのね、田村君、役者はね、辛いのはだめなのよ、声やられるから」って言ったから、辛いのとそうでないのと2種類作った。あの当時、肉よりもタカの爪を仕入れるのが大変だった。

辻：この人、まめだよ本当に。

田村：いや、いい体験させていただきました。富十郎さんが弁慶であの花道で決めてるとこ

ろにロシアの女性が花を持ってきた。それ差し出しても受け取れないよ。富十郎は芝居してる。で、しょうがないから足元に置いたんだよ。ここでスッテンコロリンやったの。その日富十郎さん気落ちして、あの状況じゃしょうがないです、って慰めてあげたけど。これはもう本人しおれてる。この富十郎さんはうちの故郷、^{しわくほんじま}塩飽本島の^{ちとせざ}千歳座の柿落しに来てくれた。藤十郎さんの関係でね。

辻：何年ごろだった？

田村：1987年(昭和62年)だよ。1ヶ月間だもんな。モスクワとレニングラードとトビリシ。グルジア共和国のトビリシはたいへんだったよ。

辻：機械はもって行ったんだっけか。

田村：いやいや、持って行くわけないよ。向こうの器材で同時通訳でポイントポイント出したの。

辻：ずいぶん助けてもらったよな。



辻氏(左)と田村氏

◎先輩諸氏のこと

岡本：この業界の先輩という方がいらっしゃるでしょ。そういう人の話題をちょっと入れておいてあげたいね。やった人のことをちゃ

んと残しておいてやらないと、オレたちはまだ生きてるからいいけど。

辻：やっぱり吉田さん(吉田貢氏)、芳龍さん(園田芳龍氏)ね。そう三味線がうまくてね、芳龍さん。

田村：芳龍さんとこへは何年くらいいたの。

八幡：3年で一番長かった。

岡本：高野さんは最後までいたの？

八幡：高野さんはね、僕が行ったときは金子さん(金子孝氏/東京サウンド)たちが出ていったあとで誰も居なかったんですよ。そこへ大道具でバイトしている早稲田の同期の者が、じゃあ一人世話しましようって、オレのところにきて「やっぱりプロについて勉強しなきゃだめだよ」って言われて、それで何だか弟子入りして、それで3年いた。

岡本：そのへん今の若い人は分からないと思うから、我々の知ってる方たちを話題にして残しておいてあげようよ。あそこから流れてこうなったんだなって分かるから。

八幡：何しろ、岡本さんと田村さんは知り合いだっていうと、まさかって言う。

田村：いや、古いよ。大阪のサンケイからだから。それで麻雀を教えられたり、ゴルフを教えられたり、悪いことばかり教えられた(笑い)。仕事しか知らないまじめな男だったのに。

八幡：それで何しろ僕が最初、田村さんにお会いした時は、もちろん若いのは当たり前で、頭が角刈りに近かった。音響じゃなくて大道具やってるって言うから、一瞬わからなくなった。

田村：大道具で生活してたんだもの。大道具では、東宝舞台とか、プロと一緒に当時日当500円もらいつつやってた。昔、音屋では

タダ働き。

辻：あれね、本当にタダなんだよ。

田村：やっぱり俳優座、芳龍さんが一番多い。吉さんとの仕事は3本ぐらいかな。だけど酒はしょっちゅう飲んでいた。当時オレは東横線の学芸大で吉さんは祐天寺にいたから、いつもうちに送り届けて帰っていた。仕事はそんなにしていなかったけども。

辻：いい人だったね。

田村：芳龍さんは余り酒を飲まなかった。

辻：飲めなかったよね。

岡本：文学座で一番古い音屋ったら、やっぱり秦さん(秦和夫氏)？

田村：美能留(吉田美能留氏)っていうのがもっと古いけどアル中で死んじゃった。奥さんは小道具で美術。この間、ニッセイバックステージ賞をとった藤野シナイ(級井)さん、それが女房。今、シナイちゃんの初期の絵を展覧会やってるときに買ったんだよ。それがちょこちょこ禿げてるんで持って行ったら、直してくれた。

八幡：これだけみんなが昔から知り合いだったっていうのは相当びっくりすると思うよ。

田村：別々の仕事をしていても、それでいてつながりがあったっていうのは事実。

岡本：それでお互いに競争もしていた。いろんなことをやりながら、こういう時に話題に出てくるような付き合いをしていた。

辻：昭和35年に新派をやめて、それで「辻音響」というのを作った。そのとき明治座で仕事してた時、明治座のそばの居酒屋で音響仲間が集まったことがある。そのときに吉さんが来てくれてネ。帰るときにね、例によって酔っ払って、タバコ啜えながらね、「お前ね、一人でやるのは大変だぞ」って慰めてくれた

の覚えているんですけどね。やっぱり吉さんっていうの忘れられないね。

それから芳龍さんももちろんわが師だしね。病院で亡くなる前、先生入れ歯外して、「頼むよ、頼むよ」って言ってる。それっきり声がね、あれは忘れられない。芳龍さんとはとにかく耳のいい人だった。

岡本：すごい朴訥でね、それでゆっくりとお話しして納得させるのね。こういう気持ちだよってね。

辻：『日本の気象』で高射砲なんか撃つんですよ。高射砲っていう音が、これの録音があるようなないようなときで、サイレンだけは出来た。それで高射砲がね、どうすんのかと思ったら、ようするに小太鼓に小さい座布団かぶせて、鉄板の端っこを折って下へ敷いてそれで小太鼓を置いてシンクロさせる、ドーンと。これは自分でやってるから分からなかったけど、客席ではそう聞こえたらしい。

田村：いや、生音では芳龍さんってのはすごいね。あのね、フィルムの塊り丸めて炎の音。

辻：そう、あのうまかった。僕は未だもってやったことないんで、いっぺんやりたいたいと思っているんだけど「ホトトギス」。ゴムマリに竹の笛を入れてとめて、それで押すと「ピョピョ」ってね。やったことないからなんとも言えないんだけどね。「これは、君いっぺんやってみてごらんなさいよ」って言われたことある。芳龍さんは初めてテープレコーダー扱った。それもやらせられて、僕はどっちかっていうとテープレコーダーが多いね。

◎音響と効果のこと

辻：いまだもって疑問に思っているのが、つ



辻亨二氏

まり音響と効果なんです。よく音響効果なんて言ったりするけど、これがよく分からなくなってきてね。この間、演劇協会を出してる年鑑を全部調べてみたら、

新劇にしてもなんにしても90%って言っていい位が音響なんです。効果っていうのは10~15%位しかない。

田村：僕はあえて効果って言ってる。

辻：自分で考え込んでいっているんだけど、今、効果って言ったっていろんなもの扱っているでしょ。とにかく効果が上がりゃいいわけだから。

田村：だから、照明の^{スケ}佐さん(篠木佐夫氏)が「おい、炎みたいなのをやってくれよ、お前効果だろが」ってね、やらされたよ。

八幡：僕は落ち葉をやらされた。

田村：もちろんあれも視覚効果。それから臭覚効果なんて言って、匂いをやったこともある。

辻：匂いは珍しいね。

田村：俳優座のあの狭い空間でね、戦争場面ではね、火薬をちょっと燃やして匂わすとか、病院のシーンでクレゾール液を匂わすっていうような臭覚効果っていうのもやらされた。視覚では茶ガラを乾かしてコンロの上で鍋で燻して煙。

辻：面白いじゃない。

田村：だから効果っていうのは臭覚、視覚、それから聴覚。

八幡：築地はそうだったらしいですね。

辻：小山内薫が風車を回したとかね。そうい

うのもあるですよね。

岡本：いわゆる自然音ですよね。

辻：だから劇場へ行くと、まず音声って言われる。音声、それから無線なんて言われる。効果とは言われない。歌舞伎座の場合、効果というと役者がやってる生の効果を効果って言うんですよ。

岡本：いわゆる楽器音ですよ。音響もそうだしね。

辻：我々のほうは効果って言わない。だからそれで、困っちゃた。

田村：新派で音調っていうのがあった。

八幡：加納さんが音調って言っていた。

辻：加納さんは音調なのよ。

岡本：加納さんも素晴らしい人だった。

八幡：音調効果って言ったらね、僕の前で冗談は言わないでくれって(笑い)。

岡本：音調って、自然の音か。この間ちょっと悩ましいところですよ。

田村：音調っていうのはなかなかいいよな。だけど簡単に使うわけにはいかんだろ。

岡本：いわゆる台詞とか喋りとか歌とかっていうのは、やっぱり音楽の部類に入りますよ。だけど自然音というのは非常に難しい。例えば自然音というのは、騒音ということもあるでしょうけど。自然に出てくる音をエネルギーに変えるというのはありますね。そうすると如何にエネルギーを増して、騒音を無くしようというのが一方にある。それはあなたが表現しなきゃいけないわけですよ。

辻：これからが大変なんだ。効果って言うのはね。

◎後輩にのぞむもの

田村：今の若い人たちはね、特色が無いんだよ。これは誰にも負けないっていうものを持ってないんだな。我々の時はそれぞれ個性があった。

八幡：それも録音されたライブラリーを使っている、本当は選ぶところで個性が出るんだけど、選ぶものも固定されてきているから。

田村：いや、それにしてもだけどね、例えば小鳥なら小鳥で、時代もあつたり、季節があつたり、地方とかの分類でね、この場所でこの時期はこれだつてというようなことを勉強してないね。

八幡：してない、それは僕もそう思う。

田村：セミなんてのもね、びっくりしたのは江戸の芝居でクマゼミが啼くなんてありえないんだよ。それをね、テレビとか映画なんかでやってるんだよ。ああいう感覚は腹立つね。

八幡：マツゼミが啼いたりね。

田村：いやもう本当にね、それはもちろん演出家、プロデューサー全てが不勉強。

八幡：結局ね、最後の決定権の演出家が勉強してないからね。こうでなきゃいけないとかね。持ってきてよ適当にとかね、適当にかよつてね。

田村：いや、今の演出家とかはね、その時に例えばクマゼミが「ジャジャジャー」とやる。暑苦しいからいいんだと、いうものの考え方だけなのよ。大事なものは、時代背景や季節、地域性をきちんと把握した上でやらなきゃだめなんだよ。

辻：そういうことってあるよね。

八幡：洒落てやるんならいいんだけどね、知

らないでやると洒落にならない。

田村：今の作者と演出家、「感覚的でいいんですよ」っていうようなところが嫌だね。

辻：例えば、侍が人の家に上がって座って、刀の大小を左に置くってほうはないんだよ。

田村：私は敵意はありませんって普通は右に置く。

辻：侍の一つの礼儀でしょう。だけど、「刀は左でしょ」って言うと、右は邪魔だからって。

田村：だからそういうのがね、キチッと言えない演出家が増えている。

辻：事実、増えているよ。だけどまあオレたちも、もうちょっと勉強しなきゃいけないこともあるかなんか思っているんだけど、なかなか難しくてね。見てると面白いしそれらしいから、そうしちゃうのかなんか思うこともあるし。

八幡：やっぱりある意味で僕ら裏方の仕事っていうのは、風俗に関してはきちっと事実を伝えるっていうのは義務だと思うよね。

岡本：裏方から見た時代考証ってあってもいいんじゃないかな。

田村：「小鳥」っていうのを分類しててね、北は北海道から絶対いない鳥、時代的にいないというようなこと、完成はしないけどもやっています。

岡本：それを伝えていかないよ。

田村：そういうことをね、誰かがきちっとしていかないよだめだということなの。それはだから日本舞台音響家協会でやるっていうようなことも大事なことなの。

◎これからやること

八幡：僕は会社から離れたら、研究所を作る

うかなんか思っている。そういう取りこぼしたところをボツボツやっていこうかなんか思っ

岡本：それがいい、そういうほうがいいですよ。効果の社会というのは、やっぱりいろんな意味の伝統とかいろいろあるでしょ。

田村：それとね、ずっと演劇がある限りは続いていくわけだから。

岡本：これから先がどうなるかということになると思う。このままでいいのか、っていうね。だから時代考証のことも考えなきゃいけない。そういうことがまず基礎だよな。

田村：だから駄目な作家、演出家がいようとも、きちっと勉強して、こうですよっていうアドバイスできるような、音屋を作っていかなきゃ。

八幡：それをね、やろうかなんかことを不遜にも思いました。

岡本：全くそのとおりで。

八幡：少なくとも効果っていうのはね、事実でなきゃいけない。

辻さんは、SBS ((株)ショウビズスタジオ)から離れるとき、どうでした。

辻：今回はね、全部、松竹に渡しちゃったから。だから今我々はもう素の人間だから楽なんだよ。

八幡：そうですか、辻さんの潔さね。

辻：社員はそのままの条件じゃないと駄目ってね。条件も給料も一切そのまま。松竹の関連会社っていっぱいあるわけだから、従業員との協定をきちんと結ばないと駄目だとか。例えば、残業の問題だとか何とか。昨日の新聞じゃ残業をその範囲をカットするって



八幡 泰彦氏

う、法律的にもそれが出てきているでしょ。

当然そうなるよ、我々の仕事はね。

田村：我々の仕事、そんなうるさいこと言ってたら立ちいかない。

辻：本当に成り立たない、難しい。例えば、昼と夜の部があるとすると昼の間に、30分の休憩があるわけで、昼から夜に変わるとき1時間の休憩がある。これも拘束時間だからって賃金の問題がある。そんなこと言ってたら、日本の個人的な仕事は成り立っていない。やっぱり職人がやって成り立った仕事っていっぱいあるわけでしょ。職人の世界を枠に嵌め込もうということになったら、まず駄目になるだろうと思っている。

田村：好きでこの世界に入ったものをどう生かすか、なんだよ。本人がどう考えるか知らないけど、労働時間云々とかいうのが入ってきたら、我々の仕事っていうのは出来ない。

辻：だけどね、このごろ怖いよ。応募者でね「えっと、月の休みは何日ですか」って。

田村：だから今の若い連中のものの考え方はそっから来るんだよ。

岡本：社会的に通用するかしないかっていうのは判断ですよ。時間外がどうだこうだっていう法律を作るんなら、まず職業を考えて欲しい。職業も考えないで一律っていうのはありえない。

八幡：でもね、一般の、何とか商事とか、そういう会社に比べてね、オレたちぐらい、身内に犯罪者がいないのはないね。みんな真面目しかとり得がない。そういうことを考えていくとまだ理解が足りないね。

◎「ため」の必要性

田村：若い人たちに伝えておきたいという意味で、もっと無駄なことでも勉強して、「ため」を持てと言いたい。というのは、音で言えば無駄な音でもコレクションする、擬音のコレクション。そういう「ため」がないと、いざというときに駄目なんだ。自分にだっていまだに使ってない音っていうのあるんだもの。ずっと取材したり、作ったり、何かのときに「あっ、この音どうなんだろう」って、作った音ってまだいっぱいあるんだ。無駄を貯えておかないと。ただ他からのコピーだけじゃ駄目なんだよ。

辻：この間、高野氏と話してて、彼が風の音を録音したと言ってた。山へ行ったらものすごく風が良い音だったんだって。風が下からずーっと上がってきて、通り過ぎてね。これが何とも言えないんで、これを録音したっていう。それをレコードにして、みんなに聞かせたって言うの。ちゃんと聴いてくれっていうのに聴かないんだって。つまり、レコードの針の目の積んだところだけ出てるからそこだけ聴いて、後は何にも音がないから聴かない。その「スー」がいいところなんだけどそれを聴かないっていう。

田村：風の音というのは、録音してもマイク吹くだけなのよ。マイクが捕らえないんだ。マイクはただ「ブーブー」いうだけ。それは自分の頭と心、肌で感じてそれをどう表現するかというのをどうするかなんだよ。

八幡：結局、風というと「ピュー」になっちゃう。

田村：その音を自分の身体で聴く。それをど

う、そういう音をその芝居で使うかっていうのはなかなかないのよ。けれどもその演出家とかドラマが、欲しいという音がそれだなと思ったら作ればいいんだよ。

岡本：もう一つあることは、いわゆるロケーションがあり、出演者があり、それを如何に感じているかっていうね、どう思っているかっていうのを、表現するのがこの人たちの仕事。それが難しいんだ。

田村：いやあ、難しい。風っていうだけでね、ト書きにかいてあるト書きは風だけじゃないんだよ。そのときはそう高野氏が感じた山のこの音かなっていうのは自分で作らなきゃ駄目なの。

◎歌(PA)のこころ

岡本：PA屋から言わしてもらいますと、いわゆるこの歌手がどういうことを歌わんとしているか。例えば、声を張ったとき上げてあげる。あるいはちゃんと語りかけるときに、どうやってきれいに出してあげるか、これだけです。だから、PA屋から言わしていただく、歌詞の聞こえない歌は嫌なの。

田村：基本だよ。

岡本：例えば歌詞も音楽のうちだっていうのがあるけど、それは違うと思う。

田村：最近の歌手、テレビ見ても、字幕が出るんだよ。ほんとに情けない。

八幡：ところが、その歌詞がつまらないんだ。

辻：カラオケがはやってるから。

田村：いや、違うんだよ。何言ってるか分からないんだよ。だから字幕が出るんだよ。

岡本：そこには感銘も何もないよ。詩を書いている人に対しても失礼ですよ。うまいという

人というのはやっぱりそれをちゃんと出している。それを如何にやるか。この人は今どういう感情で歌っているかっていうものを出したいね。これからの若い人にそれをお願いしたい。

辻：このごろ、歌詞が字余りになるっていうか、何かね、合わないというのかな、日本の言葉に合わないというのかな。そんな気がしている。

岡本：それが今、流行ってるんですよ。

八幡：よく言えば“外す”ね。ようするに、ダンス、身体が動くかどうか。

岡本：いや、その会場に来た人はいろんな発想持って来ているから。身体動かす人もいるだろうし、ゆっくり聞きたいっていう人もいる。そこをぴったり考えながら、音作りをして欲しいというのが僕の考えです。

辻：昔は歌手が歌いだすとバンドのほうも少し抑え気味に演奏したような気がするんですよ。今はみんなハッチャキになってやっている、全部返してしょ。

岡本：音楽の方法として、そういうやり方もあると思います。楽器で全部やるっていうのもある。でも、やっぱり詩をちゃんと聞かせたい、それは基本だと思う。いろんな考えがあると思います。だからこのバンドは音を聞かせて歌詞はいいと、歌詞も楽器のうちだと、という考え方もあるかもしれない。だけど、それじゃ作詞している人はどう考えているかなと思いますね。

辻：歌詞が分からなければどうしようもない。芝居だって内容が分からなければ、どうにもしょうがない。

岡本：そうです。それは共通していると思う。

田村：共通してるよ。今の機材は簡単にポー

ンと音が出るじゃない。ある時、ちょっと聞いてって言われて行ったら、バンバン出ている、おーおー、これはいいなと思った。だけでもギターソロでね、語理的にやってるときも同じ。「そんな音出すな」って言った。ギターはギターらしくソロでお客を引き付ける方法もあるだろうって怒鳴りつけたことがある。ギターソロの音をオペレーターというかPAは、そういうのを感じて欲しいと思う。

八幡：音量に対してもっとデリケートさが欲しい。

◎職業としての問題について

岡本：一つ言えることは、この業界に制度がないんですよ。ドイツにマイスターっていう制度があるでしょ。そういうものを文部科学省で考えてもらいたい。例えばアメリカから機械を全部持って来て興行する。我々がアメリカへ行って仕事するときは、人件費や何かと全部払うんです。だからこれは国で考えて欲しいですよ。日本には組織とか組合がないもんね。

辻：考えなきゃいかんですよね。

岡本：外国タレントは全部持ち込みですよ。日本の業者はどうしたらいいの？ってね。これだけ若い人が頑張ってる、みんな一生懸命やっているのに。

八幡：ドイツ製だと思ったらMade in Chinaって書いてあったりね。

岡本：日本は日本なりにいろんな機械を持ってきてやっている。それで日本に来るときは日本での場所代、それ位は払ってくれないと。この狭い世界であれだけのタレントがどんどん来るじゃない。日本の業者は何やってん

だ、ってことになっちゃうよ。

田村：情けないね。

岡本：装置から何から全部持ってくるんだから。

辻：要するに組合、向こうでいうユニオンね。それが日本には無いんですよ。

岡本：それは作らなくっちゃいけないね。前から言っているんだけど。例えば、電波法にしたって日本とアメリカとは違うんだから。それをアメリカから持ってきて、やって、平気で帰っちゃうんだから。

辻：これは問題にしないといかん問題だなんて、思ってるんですけどね。

田村：ハワイでね、一つのイベントやるんで、音響で立ち会ったの。そしたらそのホールのミキサーが入れさせてくれないのよ、ユニオンで。若い人もそういう国際的なことをもっと勉強して欲しい。いろんな意味でもっと勉強して欲しいね。

岡本：それもあるけど、もっとミキサー係も分業にしたらいいと思う。オペレーターはオペレーターでいい。それは語学も出来て、ちゃんと楽譜も読める。で、エンジニアがそばにいる、そういう仕組みを作らないとだめ。

◎大掛かりな仕事のこと

岡本：それに八幡さんとやった富田勲先生のコンサート、あれはカ入れてやったよ。長良川もやったし、シドニーもやったし、横浜もやったしね。

八幡：長良川でゴンドラに乗ってね。

岡本：そう、あれは長良川の河川敷にステージを組んで、コンサートを行ったんですが、100m幅の川の対岸にスピーカ台(幅20m)



八幡氏(左)と岡本氏

を4箇所配置し、基にスピーカ20セット(JBL)組み、手前土手に2箇所に配置した。問題はステージの両サイドの配置場所の問題でした。大雨が降ると河川敷にすぐ水が溢れて危険だから駄目だと、県の土木課の許可が出せないということだったんです。よし、それならばと「クレーン車を2台借りてこい」と云って、それにスピーカを吊り、「水がでるぞー」と言ったら、「クレーン車に乗って帰ってこい」という事でようやくOKをもらったなんてこともありましたね。

ヘリコプターにも仕込みました。2KWの発電機とアンプをゴンドラに積み、スピーカ4個下向きに取り付け、4km先のヘリポー

トから飛来して、スティービー・ワンダーが乗り込んで、メッセージとボーカルを唄い、川舟に乗った少年合唱団が唄いながら、上流から下って来る。とにかく空と川と陸の大イベントでした。でも無事に終わり、沢山のお客さんから大拍手を頂いた時は何とも言えない充実感と喜びに浸ったものでした。

辻：とにかく、何にしたって仕事に奮闘するっていうのが良いんだよね。そういうの書いたものってあるんですか？ 是非、書いてよ。

岡本：まだまだやるぞっていうのを込めてね。

辻：いわゆる、そういう奮闘記よね、そういうものが若い者にどれだけ影響を与えるかです。奮闘しているその姿がね。

八幡：今日の収穫は音響のルーツがわかったことだね。ごく仲間うちで始まったって皆な知り合いだったってことだからね。仕事は拡がったから、途中でお互い関係ないなって思ったりするけど、元々是一緒だったんだなっていうことだね。